

シダ類ノート (4)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード: 作成者: 倉田, 悟, KURATA, S. メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00065402

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



倉田 悟※ シダ類ノート (4)

S. KURATA : Notes on Japanese Ferns (4).

(19) **アイアスカイノデ** 前項に述べた如く、児玉親輔氏も既に古くこのアイアスカイノデに該当する型を認識されていたが、1937年田川基二氏が常陸鹿島郡巴村(1932年鶴町猷氏採集)、東京志村及び河内国の産品により命名発表されて、正式に世に出たものである。田川氏も記されている様にイノデとアスカイノデの中間的性質を示し、葉軸下部の鱗片は狭披針形でイノデより細いがアスカイノデの様に糸状ではなく、葉柄の鱗片もイノデより細く概ね披針形~広披針形である。而して鱗片の辺縁は一見全縁に見紛う程でイノデの様な不齊歯牙は殆んどなく、通常細い刺状突起を有するのみである。但しこの刺状突起も少くてアスカイノデに近いものから、不齊歯牙もあつてイノデに近いもの迄見られ、この点かなり変化がある。概ね葉柄下部には(時に葉軸下部迄にさえも)中央部に濃栗色の縞の入った鱗片があり、イノデにはまずかような鱗片はなく、アスカイノデには多少あるが通常アイアスカイノデ程著しくない。又、アイアスカイノデは葉面がイノデ及びアスカイノデより、巾狭い傾向が認められる。

分布については、アスカイノデが本州及び四国の太平洋岸に限られ(朝鮮産の報は誤り)而も中部地方以西には少いのに対し、アイアスカイノデは裏日本にも、古くは能登に吉川純幹氏(1938年)、近くは蟹本信雄氏(1952年)により越前に記録があり、加賀倉ヶ岳(代崎良丸1937年)、能登穴水村内浦(吉川純幹1937年N※※)、越後青梅川(中村正雄1918年N)、越後弥彦村麓(採集者?1935年)、越後角田山(伊藤至1951年同氏所蔵)、羽後飛鳥(結城嘉美1934年T※※)等の産が判明している。森邦彦氏(1953年)の記録された越後粟島のサイコクイノデも恐らく之であろう。近畿地方の各地に産する事は児玉氏等の目録(1953年)に詳しく、東海地方から関東に汎つても広く分布し、美濃金華山(加藤洋1936年N)、尾張立田村宮地(Y. Kanda 1950年)、三河段戸山樞尾(倉田悟1954年)、三河田口町田口(鳥居喜一1953年)、三河鳳来寺県有林(鳥居喜一1949年)、三河石巻村馬越(鳥居喜一1954年)、静岡市郷島(大村敏朗1953年)、相州箱根須雲川(倉田悟1954年)、相州大磯高麗山(本田正次1925年T)、相州大山(佐藤達夫1925年T)、三浦半島二子山(倉田悟1951年)、伊豆三宅島雄山中腹(倉田悟1951年)、武州奥多摩肝要峠(倉田悟1953年)、武州奥武蔵毛呂山町鎌北(倉田悟1952年)、下総佐倉町大佐倉(行方沼東1953年)、下総香取神宮(行方沼東1953年)、常陸那賀郡中野村(上野村か?鶴町猷1936年N)等の腊葉を検し得た。又、東京飛鳥山其他の産についても前項に記した。しかし東北地方の太平洋側及び中国・四国・九州には確実な報告がない様で

※ 東京大学農学部植物学教室 Institute of Forest Botany, Faculty of Agriculture, Tokyo University.

※※ N: 国立科学博物館, T: 東大理学部植物学教室 所蔵標本

ある。

私は以上の分類地理学的諸点を考慮して、アイアスカイデはアスカイノデと共にイノデの変種として分類するのが良いと思う。

(20) **オニイノデ** 1937年田川基二氏により、備後深安郡山野村産（田代善太郎氏1933年採集）をタイプとして発表されて以来、僅かに新産地として、備中及び近畿地方に数箇所と、中部地方を飛んで関東の東京都高尾山から恩方村に汎つて見出されている位の珍稀なシダである。私は先に本誌2巻4号でオオキヨズミシダとオニイノデが極めて近縁なものである事に触れたが、其後大阪の瀬戸剛氏等からも種々御教示を得て調べた結果、オオキヨズミシダとキヨスミシダには中間的なものが間々ある事を確め、瀬戸氏の言われる如くキヨスミシダ→オオキヨズミシダ→オニイノデの系列を考える事が出来た。唯オニイノデは自生地が極限されるので、オオキヨズミシダとの中間型と判断されるものは未だ見ない。しかしオオキヨズミシダはキヨスミシダに近いものからオニイノデに近いもの迄の変化があり、例えば千葉県清澄山仲ノ沢で採集したものは、大形で羽片は質厚くその切込が浅く、葉柄及び葉軸の鱗片さえ広げれば、オニイノデと何等区別無き様になると思われる。この葉軸鱗片巾の点で一応オニイノデは概ね1~1.5mm、オオキヨズミシダは0.5mm位で、不連続点が求められる。オオキヨズミシダのタイプ品は原記載によれば、或は鱗片巾の点も稍々オニイノデに近付いた型であろうか。

さてオニイノデの分布状況から、その中部支那にも自生する事は期待されるが、東大理学部腊葉庫にはA. Henry氏により湖北省で採集されたオニイノデと全く一致する腊葉が入っている。この群には中支から西南支にかけて近縁種があり、*Polystichum neo-lobatum* NAKAIや*P. xiphophyllum* DIELS等、果してオニイノデと別種かどうか難問題を提供している。

(21) **ミヤコイヌワラビ** 本羊歯の分布は近時次第に解明されて来たが、本州中南部・四国・九州に広く自生するらしい。しかし裏日本には見出されていない。山中、鎌倉両氏の四国シダ類目録(1954年)には洩れているが、既に田川基二氏(1936年)が伊予産を記録されて居り、又阿波祖谷谷口峠(枝重直器・徳度万弘1916年、小田原高校松浦茂寿氏所蔵)、土佐朴ノ川山(吉永T)にも採集されている。其他私が調べた腊葉中には肥後八代郡宮地村猫谷(中島濤三1911年T)、日向西臼杵郡岩戸村(緒方松蔵1913年N)、周防佐波郡滑山国有林(岡国夫1948年)、紀伊有田郡八幡村(岡本省吾1934年T)、伊勢鎌ヶ岳(槌賀安平1932年N)、三河段戸山(倉田悟1954年)、駿河両河内村上黒川(大村敏朗1954年、本自生地は志村義雄氏の発見)、伊豆浄蓮滝(児玉親輔1909年T)、伊豆城東村白田入(倉田悟1949年)、武州奥武蔵名栗村狼窪(倉田悟1953年)等がある。本種も中支に産する可能性が高く、事実、中支から北印度にかけては比較検討すべき近似種がいくつか自生している。

三河段戸山では海拔400~800mの林下水辺数箇所にて遭遇したが、中には全株紫味を欠く株があり、この様な型がある事は田川基二氏も先に追加記載されている。ミヤコイヌワラビは葉柄や葉軸、羽軸等が鮮かな紫色を呈するものを典型とし、葉柄には最上部を除

き紫味を欠くといった様な中間型もあるが、この全株淡緑色で全く紫味のない極端品を1品種として区別し、ダンドイヌワラビと名付けよう。

(22) **ツクシオオクジャク** 本羊歯については田代善太郎氏が1935年肥後内大臣山にて採集せられたものに基づき、田川基二氏が1940年に記載され、筑後 釈迦岳(田代善太郎1934年採集)をも一産地として記録されて以後、何等言及されていない様である。私も農林省林業試験場の前田禎三氏から同氏が type locality の内大臣山国有林にて1953年に採集された腊葉を頂いて、始めてこの珍羊歯を研究する機に恵まれた。それでは一体ツクシオオクジャクとはどんなシダかと言えば、オオクジャクシダ (*Dryopteris Dickinsii* C. CHR.) に極めて近似のもので、伊藤洋氏の日本羊歯類図鑑(1944年)第226図にオオクジャクシダとして出ている写真、即ち日向西臼杵郡椎葉村尾前(吉江 清朗1933年T)産の腊葉が実ははこのツクシオオクジャクである。この写真の様に少々小形のソーラスが羽片の辺縁に極く接近して着くので、オオクジャクシダとしては?と、ちよつと首をかしげたくなる様なものだ。勿論オオクジャクシダもソーラスは辺縁寄りに生ずるが、これ程著しくはない。又、羽片巾が広い割に長さは短かく、羽片の切れ込みは浅くて小羽片とならず殆んど重鋸齒様をなし、小羽片の側脈は2~3対で3~4対を普通とするオオクジャクシダより少い事等は良い特長である。前田氏の採られたものは原記載より発育が良く、葉面は長さ56cm、巾22cm、羽片数は25対位、最大羽片は長さ11cm、巾2cmに達し主側脈の基部は約3mmの間隔を保ち(オオクジャクシダでは約4mm)又、羽片の切れ込みの溝も深さ1mm位を普通とし、羽片基部では勿論更に深くなっている。こうなると田川氏も注意されている様に、益々支那雲南省産の *Dryopteris Handelianana* C. CHR. との区別が難しいと思われる。

私の調べたツクシオオクジャクの腊葉はこの他、肥後八代郡五ヶ庄(採集者?1904年T)、九州(田代善太郎1914年1月14日N、詳しい産地不明)及び日向真幸村矢岳(滝一郎1949年11月)がある。前二者は内大臣山附近の採集かも知れない。尙、内大臣山にはオオクジャクシダ(田代善太郎1931年N)の方も自生している。ツクシオオクジャクは九州一円は勿論の事、四国・中国両地方の深山にもその産が期待されるので、同好者の御注意を期待する。

(19) ***Polystichum polyblepharum* Pr. var. *intermedium* (TAGAWA) KURATA, stat. nov.**

Polystichum polyblepharum Pr. var. *fibrilloso-paleaceum* TAGAWA form. *intermedium* TAGAWA in Jour. Jap. Bot. 13: 187 (1937).

Distr. Central Honsyû.

Except the Districts of Hokuriku, Kantô, Tôkai and Kinki, this fern is hardly found. The lamina of it is narrower than those of var. *polyblepharum* and var. *fibrilloso-paleaceum*, the paleae of stipes and rachises having intermediate characteristics between the latter two.

(20) ***Polystichum rigens* TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. 6: 91 (1937); H.**

Ito, Fil. Jap. Ill. pl. 315 (1944).

Hab. Central China : Prov. Hupeh (A. Henry-no. 5962).

Distr. Honsyû (Provs. Musasi, Iga, Yamato, Settu, Bittyû and Bingo) and new to Central China.

Polystichum neo-lobatum NAKAI and *P. xiphophyllum* DIELS, both of Central China, are species related to this fern.

(21) **Athyrium frangulum** TAGAWA in Jour. Jap. Bot. **12** : 749 (1936).

Athyrium iseanum ROSENSTOCK var. *fragile* TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. **2** : 15 (1933).

Distr. Honsyû (Provs. Musasi, Izu, Suruga, Mikawa, Ise, Ômi, Yamasiro, Tanba, Harima, Kii and Suwô), Sikoku (Provs. Awa, Tosa and Iyo) and Kyûsyû (Provs. Tikuzen, Tikugo, Higo and Hyûga).

form. **viride** KURATA form. nov.

A typo differt foliis toto viridibus.

Hab. Honsyû : Mt. Dando, Prov. Mikawa (Kurata no. 821, Aug, 1954 - the type in Herb. Fac. Agr. Tokyô Univ.).

In the typical form of *Athyrium frangulum*, both stipes and rachises or at least rachises are purplish.

(22) **Dryopteris Tasiroi** TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. **9** : 236 (1940).

Dryopteris Dickinsii auct. non C. CHR., H. ITO, Fil Jap Ill. pl. 226 (1944).

Distr. Kyûsyû : Provs. Tikugo, Higo and Hyûga.

Judging from the materials of this fern collected by Mr. MAEDA at the type locality in 1953, which have more deeply incised pinnae (sinuses generally 1 mm deep), it becomes more probable that this fern is conspecific with *Dryopteris Handeliana* C. CHR. from south-western China, as Dr. TAGAWA have already noticed.

○金沢植物同好会行事報告 (昭和29年)

本会と姉妹関係にある金沢植物同好会では金沢大学教授正宗巖敬博士の御指導で採集会を行つていて、昭和29年度には下記の例会を行つた。(下沢 報)

回	年月日	採集場所	参加者	備考
26	29. 3. 28	長屋谷 — 卯辰山	15	曇後雨
27	〃 5. 16	奥医王 — 白兀山	18	栃尾より
28	〃 7. 4	倉ヶ岳	10	
29	〃 8. 29	平栗 — 黒壁	15	
30	〃 10. 3	医王山	2	福光より, 天候不良
31	〃 10. 17	後高山	6	